
Whisper

桂 恭介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Whisper

【Nコード】

N5618K

【作者名】

桂 恭介

【あらすじ】

尊は学園で普通に生徒会長を務め、普通に生活を送っていた。そんなある日、偶然見つけた事故に首を突っ込み、この世の理とかけ離れた力を手に入れる。契約を交わした尊は大切な姉を守るため、取り戻すために戦う。相手は国の長。壮絶な戦いが待ち受けているのは間違いない。たった一人でウイスを武器に戦いを繰り広げるSFストーリー！

夢

守りたいものというのは誰にだってある

守りたいものというのは

ただ些細な、ほんの小さな幸せにすぎない

お前もまたその小さな幸せを手にしたかった一人にすぎない

そうだろうか？

「……………」

仮に違うというのならば

お前に与えたその力は何だというのだ

幸せを手に入れるために

使っているようにしか、私には見えないのだが

まあ、どのように使ってもらっても構わない

私の望みを叶える契約の対価さえ払ってくれればな

さあ魅せてくれ、我が同志よ

出合い

……いやな、夢を見た

キーンコーンカーンコーン

「では以上で授業を終了します。課題は必ず明日までに提出するよ
うに」

「きりーっつ、れー」

俺は家では滅多に寝ない。

故に学園は睡眠をとることができる唯一の場所である。

「おいソン。起ーきーろー」

「……おはよう」

俺を起こしたのは佐藤 勝美。

生徒会で会計をやっている。

「授業中寝てばっかで会長は務まらんぞ」

緑ヶ丘学園生徒会長を務めているのはこの俺、榊 尊。

この学園では強制的に部に所属しなければいけない。

そんなことを知らなかった俺は入部届け提出日を過ぎてから、空席
であった生徒会部の会長となった。

「ミコトー、生徒会始まるわよー」

書記の二階堂 真子につれられて向かうのはもちろん生徒会室。

県の税金をとつてもなくつき込んでいる学園のため、無駄に生徒会
専用校舎がある。

たった6人しかない生徒会部のためにご苦労なことだ。

「はい、今年の部費予算案。ハンコよろしくー」

「おいおい……多くないか？」

副会長の成瀬 琴美の差し出した書類は厚さ10センチほど。

部は俺の知る限りこんなにはずだ。

「だって学園長用のプリントと、職員全員分のプリントと、PTA

のほうのプリントで結構あるでしょ。その部数だからこんなもんよ」

「副会長。とりあえずこんだけ終わらせて」

勝美は仕事に取り掛かるのも終わらせるのも早い。

「さすがね。会長変わっちゃえ」

「変わるもんなら変わってくれ」

俺は帰ろうと席を立った。

「はい、ちよつと待ちなさい」

「なんですか？副会長」

肩を押され座り直される。

「今日このあとみんなでカラオケ行くから仕事ちゃんとやりましょうねっ」

笑顔で語りかけてくる副会長は確かに美人だが、怖い。

「川崎と谷口は何でいない？」

「あの二人は昨日のうちに仕事終わらせてるからいいわー。今頃一緒にゲーセンだと思っわよ」

「女ふたりでゲーセンねえ……」

仕事を終わらせた勝美と二階堂は有意義に紅茶を飲んでいた。

たかがハンコを打つだけとはいえ、同じ作業をしていると面倒になつてくる。

そんな作業もやっと終わり、時計を見ると5時前だった。

「さあパーツとストレッチ解消に行きますか！」

「「おー！」」

二人は待ちくたびれたと言わんばかりに部屋を出て行った。

終わったばかりの俺はとりあえず休みたかったのだが、行動の主導権は副会長。

逆らうわけにもいかずについていくことになった。

毎度のことだが俺なんかより副会長が会長やったほうがいいと思っただが……

「副会長と一緒にだとやっぱり歌いやすいわ〜」

「ないない、真子の足引つ張ってるのあたしよ」
毎度のことながら男は歌わない。

何のためにカラオケに来ているのか。

次から次へと予約を入れる女の間割り込めないわけで……

「あーそろそろ時間だな。出るか」

そんな感じでいつの間にか終了時刻と、いつものパターンだ。

「んじゃあたしら車だからまたね〜」

「ういー。んじゃ勝美よろしく」

「はいはい」と

俺は勝美のスクーターにまたがる。

外はもう薄暗くなっていた。

肌寒い季節、日が落ちるのも早くなってくる。

「なんだなんだ」

勝美はスクーターを止めた。

声のするほうを見ると、大勢の人だかりができていた。

どうやら謝って建物に車が突っ込んだらしい。

「おいおいやめとつけて……って、もうソーンいねえし！」

俺は車のほうへと駆け寄った。

「大丈夫か？」

「……ああ……」

車内の人は無事のようにだ。

あとは建物の中の人だが……ここは何だ？

この時間に電気もつけずに真っ暗だ。

何かの研究所だろうか？

あたりにはビーカーや試験管が転がっている。

好奇心からか奥へと行きたくなった。

進んで行くと、あかりの漏れている部屋があった。

もちろん救助に近い行為なので身構える必要はないのだが、とっさに身を隠した。

なぜかはわからないが入ってはいけない気がする。
そつと扉に触れた。

「ここで何をしている」

後ろから声がかかった。同時に頭に冷たくて硬いものが当たった。

拳銃

「く、車が衝突していたから救助に着ただけだ」

「……中を見たか？」

中？この部屋の中だろうか。

「いや、まだ入っていない」

「じゃあとつとと帰れ。失せろ」

「あ、ああ……しかし状態では帰れない……出口まで連れて行ってくれないか」

俺はこのまま帰る気などなかった。

どうしてもこの扉を開けたかった……いや、開けなければいけない気がした。

「いいだろう、ついて来い。ただし妙なマネをしたらすぐにこいつで……」

今だ　！

ボタンッ

部屋に入り、すぐさま鍵を閉めた。

「てめえ！出て来い！」

男が凄い勢いで扉を叩いている。

しかし俺にはそんなことどうでもよくなった。

部屋に圧巻されていた。

まるで漫画やアニメに出てくるような巨大なホルマリン漬けがあったからだ。

ただのホルマリン漬けではない。

その中にいたのが人間の女であることに目を疑わずにはいられなかった。

目覚め

「なんだ……これは……」

中にあるモノの口からは泡が出ていた。

「生きているのか……」

すぐさま助けようと周りを見渡した。

しかし、見たこともないような機会ですり抜けることもできない。

ドゴオン！

「てめえ……見たからには死んでもらう」

扉は蹴破られ、男が入ってきた。

男だけではない。

後ろから4人ほど部下だと思われる男がついてきた。

言うまでもなく、手に銃を持って。

「まだ打つな」

男は後ろの男達にそう呟いた。

弾が後ろのこれに当たたらまずいのだろう。

「これが何なのかは知らない。しかしこれが壊されたらまずいよう

だな」

俺は持っていたボールペンで軽く叩いた。

男は物凄い形相で睨み付けてくる。

「お前、自分がどんな状況にあるかわかっているのか？……取り押

さえる」

後ろの男達が動いた瞬間……

パリンッ！

俺はボールペンを突き刺した。

液が溢れ出す。

「てめえよくも……打て！」

パリンッ！パリンッ！

身を屈め、机を盾にして女を確かめた。

「おい！大丈夫か！」

反応はない。

「おい！」

呼びかけるが、ピクリともしない。

「観念しろ。運が悪かったな……学生さん」

男達に回りを囲まれた。

銃口が四方八方から向けられる。

俺は死ぬのか……？

俺はこんなくだらないことに首を突っ込んで死ぬのか？

生きているかも死んでいるかも分からない、知らない女に、好奇心をそそられて拳銃の果てに死ぬのか？

こんなところで死んだら……

こんなところで死ねない！

何か、何か手は……

！

女が目覚めた。

同時にすごい速さで俺に口付けをした。

「なっ！？」

（こんなところで死にたくないのだろう？）

脳に直接語りかけるように言葉が連なった。

（やり遂げなければいけないことがあるのだろう？）

……そうだ。

俺にはやらなければいけないことが……

（じゃあ契約しろ）

男達はどうなった？

あたりは白一色になっていた。

（私はアリス。どの道契約しなければお前は死ぬ）

わかった……契約しよう。

(ふふ。気に入った)

……俺は立ち上がった。

「何だ、最期にキスできて思い残すことはねえってか」
男どもは腹を抱えて笑っている。

俺は冷静だった。

「何を立ち尽くしてるんだ？怖くて声もでねえのか。最期に何か言わせてやろうと思っただがな」

「では遠慮なく言わせてもらおう」

男達は笑うのをやめ、訝しげな表情をしている。

「……何？」

「主が命じる。この場から立ち去れっ　　！！」

あたりは静まり返った。

「……ああ。わかった」

自分で自分のしたことに呆気に取られていた。

その場に俺と女しかいないことに気がついたのは数分後だった。

「おい！怪我はないか！？」

「おいではない。アリスと呼べ」

アリスは近くにかけてあった白衣に着替えているところだった。

「アリス……あの男達はどうなった？なぜ俺は生きている？」

聞くと、アリスは鼻で笑った。

「お前が立ち去れと言っただんじやないか」

「それはそうだが、なぜ言うことを聞いた？契約とは何だ？お前はなぜこんなところにいる？」

俺はわけが分からないまま、パニックになっていた。

「はあ…慌しいやつだな」

嫌そうに、気だるそうに一つ一つ口を開いた。

「お前に与えたのはウィス。絶対命令の力。お前がその気で話せば、聞いたやつはどんなことであっても言うことをきく」

「声か？」

「ああ。その声を与え、契約を交わしたじゃないか。それとも自分の美声に触れられて怒ったか？」

声は聞く分には変わっていない。

鼻で笑う態度がイラつくが……そんなことはどうだっていい。

「契約とは何だ？何か対価がいるのか？」

「対価は後々教えよう。ウイスについて先に説明しておく。さっきも言ったと思うが、絶対命令の力、それがウイス。たとえ死ねと命令したとしても、聞いた相手はそれを実行する。ウイスでの有効範囲は自分を中心に半径500m程度。自分に対して複数でも個人でもかけることができる。有効時間は最大半年。補聴器等の機械を通す分には問題はないが、耳栓などで完全に音をシャットアウトされると効力を発揮できない。使うことによる代償はない。能力には劣化もなければ進化もない。後遺症も肉体的にはあまりない。ウイスの発動中の記憶はその対象となる相手に残らない。なお、ウイスをかけることができるものは動態的な生物にかぎる。この能りよ」

「まてまてまてまて！説明が早すぎる。そもそも突然非現実的なことを受け入れられるはずがないだろ」

「じゃあお前はなぜ生きている？使ったからだろう。力を」

確かにそうだ……

この力は認めざるを得ない。

だっ たら……

「お前は何者だ？教えろ、これは命令だ」

「私にウイスは聞かない」

「くそっ……」

まだ頭がパニックになっているが、とりあえず分かった。

俺はもう普通の人間ではないのだ。

「大丈夫だ。そんな顔をするんじゃない。私はお前の味方だ」

味方、か……

復讐には使えるかもな、この力……

むしろこれはチャンスなのかも知れない。

「私が何者かなんて、聞く必要なかるう」

「そうだな……」

「私はアリス、ただそれだけだ」

思い

「おー。今日はみんないるんだな」

生徒会棟に勝美が入ってきた。

生徒会とはいえ毎日仕事があるわけではない。

しかし一応部活なので全員集合するのが日課となっている。

部活何だか、娯楽何だか分からないくらい内容は緩いものだが。

「ソン昨日どうしたんだよ」。警察まで来てて心配したんだぞ」

「悪い悪い。あのまま戻るわけにも行かないと思って帰ったよ」

「昨日なんかあったの?」

ソファーで座ってた副会長が聞いてくる。

「事故やっててさー、ソンが現場に飛び込んでったんだよ」

「ミ、ミコト怪我ない!?!」

聞いていただけの真子が声を裏返して聞いてきた。

思わず笑ってしまう。

「俺が事故ったわけじゃないんだし」

安堵のため息をついている横で、副会長が奇怪な目をしているのが

気にかかる。

「どうしました?」

「べつつにい〜。真子ちょっと……」

彼女はたまに変な行動を取ることが多いと思う。

やはり年齢が違つとそうなのだろうか。

「てかさ、あの二人はまたいつもの?」

「俺に聞くなよ。二階堂」

ビクッ!

……視線を送っただけなんだが、俺何かしたか?

「お前……まさかうちに住み込む気じゃないだろうな?」

「アリスだ。何度言ったらわかる」

昨日、家に帰ってからの話だ。

俺は姉と二人暮らし。

母は俺が幼い頃に交通事故で他界した。

あの頃のことを思い出すと、今でも頭の中が真っ白になる。

父は当時から国のピーク。

この国のシステムは単純だ。

賢い人が国を治める。

治める、という言い方には語弊があるかもしれない。

賢い人が国を支配する。

そしてそのトップに立つのがピークと呼ばれる人。

ピークには絶対権力が与えられる。

つまりすべてを自分の思い通りにすることができるのだ。

ピーク選挙は1年に1度ある。

1年に1度の選挙で大抵の場合、ピークは交代する。

しかし父はここ数年ずっとピークを維持している。

国民の支持が高いという専門家の意見があるが、それは違う。

あの偽りの仮面を被った悪魔を……俺は……

「おい、聞いているのか？」

「ああ……すまん。ここに居候するのは仕方ない、認めよう」

居候、という言葉聞いて顔をしかめた。

「貴様は私なしでは生きていけない。だから私はここに居座る」

「意味がわからないが……とりあえず姉さんの部屋には入るなよ」

「何か問題でもあるのか？」

こいつは……常識というものはないのだろうか。

事情を知らない人からしたら男が女を部屋に連れ込んでいる状態だ
というのに。

極力他人には知られたくない状況であるのは確かだ。

「お前がここに住めなくなるかもしれない。そうするといろいろ不便だろう？」

アリスは少し考える動作をして、納得したようだった。

「おい、これは何だ？」

机の上にあるものを指さした。

そこには今流行りのお菓子が置いてあった。

「食い物だ。食べていいぞ」

ベッドで寝転がっていたアリスは跳ね起き、袋を眺めていた。

俺はそれを眺める。

切り口が見つかからないらしく苦戦している様子。

結局爪で無理矢理開けたみたいだ。

そのひとつを口へ運び……目が輝いた。

つくづく、変なやつだ。

「ソン、ゲーセン寄ってこーぜー」

「今日姉さん病院の日なんだ。また今度な」

「そっか。お大事にな〜」

今日はウイスについていろいろと実験をした。

さすがに生徒で実験するわけにはいかない。

生徒会のメンバーなら尚更だ。

彼らの意思を無視して命令するなど、知人にそう易々とできるほど

俺は冷酷な人間ではない。

アリスが早口で大体のことを話していた記憶を頼りに、とりあえず

野良猫で実験してみた。

そして実感したことはただひとつ、この力は本物だということ。

転べと言えば転び、来いと言えば寄り、来るなど言えば遠ざかる。

言っではないが、死ぬと言えば死ぬ勢いだ。

コンコン

「姉さん、入るよ」

扉を開け、ベッドに腰かけている姉さんが目に入る。

何度も、何度も見た光景。

「こんにちわ」

その笑顔も、その言葉も、痛々しいほど今まで何度も感じた。

「ええと……失礼ですがお名前を伺ってもよろしいですか？」

そして一番聞きたくない言葉。

困ったような作り笑い、曖昧な表情。

聞くたびに暗闇のどん底に投げ込まれる思い。

幾度となく受ける傷。

そしてこれは自分の罪なのだとはつきりと実感し、懺悔する時。

「……僕はミコト。あなたの弟だよ、姉さん」

姉さんには記憶がない。

それだけならいい。

朝起きてから夜までの記憶しか残らない。

つまり次の日にはまたすべてを忘れている。

忘却の呪い。

呪いの螺旋。

これは自分の弱さが作り出したものだと、わかっている。

わかっているからあの男を……父を……何があってもこの手で……

あいつに奪われた姉さんの記憶を取り戻す。

俺から何もかも奪ったあいつから……

今日、このときをもってさまざまな歯車が回り始めた。

そのことに気付いているのは誰もいない。ただ1人を除いて……

不安

アリスと契約を交わしてから、幾日かが経った。依然として自らの能力をどこまで信用していいのかわからない。

本当にウイスの発言はどんなことがあっても実行されるのか、という疑問に思う気持ちと、実際そうなってしまったら……という不安に思う気持ちが葛藤している。

窓際の席に座っている俺は、空を眺めた。雲ひとつない快晴。

「今日は転入生を紹介するわ」

担任教師の一言で朝のホームルームが活気溢れた。

男だろうか、女だろうか。

どこから来た子だろうか、どうしてこんな時期にきたのだろうか。

さまざまな言葉が飛び交う教室。

「静かに！じゃあ南城君入って」

「ちえーっ、男かよ」

男子からは残念そうな声上がる。

南城と呼ばれた男はゆっくりと教卓の前まで歩いた。

第一印象は髪が長い。

下手をしたら女性よりも長いロングウルフの男。

教室内の女子からはカッコイイと声が上がっていた。

一方、男子からは良い視線で見られていない。

俺、あいつとなら付き合えるという、想像するのも身の毛のよだつ声が聞こえたわけだ。

一瞬目があった。

俺はすぐに目をそらしたが、向こうはこちらを見続けているようだ。

「……榊？」

呼ばれて驚いた。

「あら、榊君と知り合い？それならすぐにクラスにも馴染めそうね」
にこにこしながら先生が南城に自己紹介をするように言った。
話し始めたのはいいのだが、俺はまったく彼のことを思い出せ
ずいた。

「よろしくね」

隣の席に南城が座ったと同時に彼のことを思い出した。

フラッシュバックするかのように、一気にすべてを思い出した。
母の事故のことも思い出してしまい、気持ちが沈む。

「あ、ああ。久しぶりだな、南城」

「うん。榊ったら目そらすし、僕のこと忘れちゃったかと思って心
配したよ」

「忘れるわけないだろ。髪伸びてて同様ただけだった」

南城の笑顔を壊すわけにもいかず、忘れてたなどとは言わなかった。
無意識に外を見た。

っ！？

目を疑った。

アリスが木にぶら下がっているではないか。

「榊、化学実験室には……」

チャイムが鳴ると同時に俺は駆け出した。

あいつが見つかるといういろと厄介しかない。

校内に無断で侵入など……

もっとも恐れるのは、アリスを閉じ込めていたやつらに見つかるこ
と。

それだけは何としても避けなければ命の危険が伴う。

「お前！どういうつもりだ！」

「お前ではないと、何度言ったら……」

アリスは顔をしかめ、いつもの台詞を口にしようとした。

しかし言うより早く体育館倉庫へと連れ込んだ。

「何と手荒なやつだ。女はもっと丁寧に扱え」

「バカか、お前は……いろんなやつにお前が見つかる厄介なんだ。

家で大人しくしている」

「こんなところに連れ込んで……まさか、外出した仕置きに私を犯すつもりではないだろうな？」

「いいか、お前は男達に捕らわれていたんだぞ？近くにあいつらがいるかもしれない。危険だ、家から出るな」

「なんとという男だ。見損なつたぞ」

だんだんと頭に血が上るのが自分でもわかる。

こいつに話は通じない。

味方だの何だの言っておいて、結局は自分の赴くままに行動する。ふと気がついた。

こいつに俺のこれからの行動を伝えていなかった。

何にせよ不安要素を増やさないでもらわなければならぬ。

「……ともかく、外に出るな。わかつたな」

俺は返事を聞かずに扉を閉めた。

「ほんとに神は昔のままだな」

「ミコト昔からこんなだったの？」

南城はすでに仲良くなつた生徒会メンバーと昼食をとっていた。

手の早い副会長はすでに南城を生徒会部へ入部させた。

特に入りたい部もなかったからちよつどいいと言っていたものの、本当にいいのだろうか。

副会長の強引さには誰であろうと敵わないと思う。

「珍しくあの二人いるじゃん。南城、あいつら滅多に見れないから話しかけてくるといい」

「……ソソって意地悪だよな」

目で勝美を黙らせると、南城に再度促した。

「うん、気遣いありがと」

みんなに早く馴染むことができるように、という配慮だと思って感謝しているのだろう。

しかし生憎、そんなに優しくないので実際のところ。

川崎舞と谷口綾はかなり排他的な性格をしている。

そのため、自分たち以外と会話することはほぼない。

そんな彼女達を放っておけなかった副会長がこの部に誘ったのだ
た。

「おかえりーどうだった？」

「仲よくなれそうだよ。生徒会部に誘ってもらえてホント、良かった」

みんな言葉を失った。

あの二人が口を利くなんて、驚きを隠せない。

ただ一人南城だけが不思議そうな顔をしていた。

平凡な一日の終わりを告げるチャイムが鳴る。

こんな日が続くと続くのも悪くないと思う。

「今日こそは町いくからな！」

「ホント、悪いが姉さんの具合があんまりよくなってさ……」

「そうか……たまには息抜きも大切だからな。無理しない程度に頑張れよ」

これだけ嘘をつき続ける俺の言葉を信用してくれる勝美。

勝美には申し訳ないがこれからの計画をアリスに伝えなければいけない。

そう、俺の復讐を。

彼女は自分は味方だと言った。

信用するに値するかどうかはさて置き、契約を交わしたのだから俺を殺すようなマネをすることは無いと思う。

「クソが……」

家の中をくまなく探した。

アリスの姿が見つからない。

あれだけ外には出るなと言っておいたのに……

まさかまだ体育館倉庫にいるだろうか。
あの放浪女が一日中あそこにいるとは思えない。
冷静になろうと思えば思うほど、頭は混乱する。
時計の針の音がさらに切り詰めた空間を圧迫する。
そうだ。

「姉さん、開けるよ」

「おかえり」

読んでいた本から顔を上げ、他人行儀な笑顔を向けてくれる姉さん
を見ると辛い。

しかし今はそれどころではない。

今後の行動に支障をきたすかもしれないのだから。

「ここに女の子こなかった？」

「うーん。ごめんなさい、分からないわ」

「そっか、邪魔して悪かったね。少し出かけてくるから」

アリスは朝、飲み物を買ってくると言って俺の登校についてきた。
そのまま学校に来たはずだ。

姉さんも見ていないということは、学校からすぐにどこかへ向かっ
たということか。

「あ……」

「どうしたの？」

「気をつけてね」

姉さんを見ていると、数え切れないくらいの感情が生まれる。

このときもまた、新しい感情を覚えた。

勝美には姉さんの看病と言っているため、変装して玄関へと向かっ
た。

「……どこかへ行くのか？」

玄関には大きなダンボールを抱えたアリスがいた。

ドンッと床に置くと、大きなため息をついた。

「私がいないとそんなに怖いか？」

怖い……違う。

「安心しろ、前にも言ったが私は味方だ。勝手に消えることなどない」

「外に出るなと言っただろ」

呆れたような、安堵したような声だった。

自分では変な声だと思ったが、アリスは特に気にする様子もなかった。

「仕方ないだろう。これが切れた」

ダンボールの中を覗くと、こないだアリスが気に入って食べていたお菓子があつた。

「こんなもののために身を危険に晒すな」

「大丈夫だ。あいつらは追ってこない。それより何か、私の美しさに魅了されて近くにいないと不安なのか？他の男に取られないか不安なのか？可愛いなあ」

「バカ言え。それより大事な話がある」

「何だ、プロポー」

「今後の計画についてだ」

部屋に戻り、話を進めた。

あの男によつて奪われた姉の記憶。

取り戻すためにあいつに直接会つて話をする。

そのための計画を伝えた。

「その男はピークなのだろう？人間の範囲で許される、ウイスに近い力を持っている。私には無謀すぎると思うがな」

「無謀でも何でもやってやるさ。これは俺の償いでもある。それに

お前は……」

「お前の味方だ」

初めてアリスが笑った。

不気味な笑みではあるが、はっきりと笑った。

「明日から計画を進めていく。頼んだぞ」

「ふふ、お前は面白いな。茶番に付き合つてやるつではないか」

死

「人間というものは、実に弱いものである。何かを蹴落とし、自己より弱いものを創ることによって自らを優位に立たせようとする。私はそれを悪だとは思わない。むしろ人間として間違ったことをしていない、当たり前前行動であると考えている。つまりは戦争で人を殺せば英雄に、日常で人を殺せば犯罪者になることと同じだ。ときに、人間が他の動物とは決定的に異なるものを持つているとすればそれは何だろうか。心だ。人間がケダモノであるというのなら、自分を優位に立たせるために様々な手段を犯すだろう。心という制御があるからこそ、全ての人間がそれを実行しない。しかし、それでいいと思っっているのか。心という呪縛に囚われ、人間の本質を見失っただけではない。私が皆の心を預かるう。全ての罪を受け入れ、私だけが、ケダモノとならうではないか。存分に競い合え。存分に互いを蹴落とし合え。そこに本当の弱さを見出したときが正義なのだ。平穏な日々が続くのはいいことだ。しかし代償があることによってさらに良き日が生まれるのであれば、それもまた今日までの日々を蹴落として手に入れる栄光であろう。より良きを得るには過去に見切りをつけなければならぬ。競いあうところに生まれる正義に疑問を感じる必要はないではないか。さあ、新しい未来を共に築き上げていこう。ついて来るがいい」

歓声。歓喜。拍手喝采。

「これは何かの宗教か？」

向かい合わせに座るアリスはコーヒを啜りながらこう言った。高校生くらいにしか見えない女の子が、本当にブラックを飲めるとは思っっていなかった。

それに様になっっている姿がまた別の意味で滑稽である。

本人曰く、『お前みたいなのがキよりよっぼど年上』らしい。

「自分でも言いたくないが、父だ」

テレビの画面に映る映像を睨みながら答えた。

「つまりお前の殺したい標的だな」

殺したい、と聞くと少々たじろぐ。

確かに殺したい。

殺したいほど憎い。

だが自分の手を汚したくないという偽善をまだ振り払えないでいた。

「穏便に済ませられるのならそのほうがいい。しかし……」

「無理だな」

ウイスを手に入れて俺は変わってしまった。

絶対命令による力で、全てを思うがままにできる。

殺したいだけなら、あいつのいるところから半径500m以内に入り、『自殺しろ』と言えばいい。

もし力を手にしてなければ、怒りをぶつけるだけで終わったと思う。その末路が殺人となったとしても、後悔はしないはずだ。

しかし今となつては姉さんの記憶を取り戻すこともでき、さらにあの日のことをあいつから直接聞くことができる。

もし殺してしまつたら間違いなく後悔する。

後悔はしたくない。

全てを奪つたあいつから全てを奪い、この冷たい世の中に放り出してやりたい。

「お前は、契約をしたときからすでに黒く染まっている。今さら人を殺めることだけはしたくないと戯言を抜かすつもりか？」

「違う。俺にはあいつに直接聞かなければならないことがある。だから殺さない、それだけだ」

アリスは俺の言うことを信用していないようだった。

そしてテレビを消し、不意に立ち上がった。

「ミコト、ついて来い」

「初めて名前で呼んだな。少しは心を開いたと思つてもいいか？」
こちらを振り返ったかと思つたら鼻で笑い、言い放った。

「好きに妄想するがいいさ、坊や」

つれられて来たのは、アリスに初めて出会った場所だった。立ち入り禁止のテープを破つての進入。

なぜわざわざここに戻ってくる必要があるのか聞いてみたが、先ほどから頑として口を利いてくれない。

ただひたすらに上へと階を上がっていった。

エレベーターはあるが、人の気配も明かりもないところからすると使えそうにない。

ひたすら階段を上っていく。

「ついたぞ」

「……扉？」

5階ほど上がったところに、他とは別の感じがするドアがあった。見た目も違えば大きさも違う。

「お前には人を殺す覚悟がない」
断言された。

言い返す言葉も出てこない。

「支部をつぶしにかかるのにそれでは甘すぎる。練習だ」
俺はあいつの居場所を知らない。

極少数ではあるが、ピークに逆らう集団はある。

最悪の事態を考えて、ピークは身を隠し、指令は各地の支部から送られる。

別にこれはあの男だけではなく、歴代のピークもそうだ。

そこで、支部をつぶしていけばあいつも黙ってはいられなくなり、動きを見せ、姿を現すだろうと考えた。

「俺に殺させようここにつれてきたのか。中にはマフィアでもいるのか？」

返事の変わりに返ってきたのは、ドアの開く音だった。

とっさに身を屈め、壁に背を預けた。

「安心しろ」

しかしそこにはマフィアなどいなかった。

目の前には明らかにビルの中ではない、密林が広がっていたのだ。

「何だ……ここは……」

っ！？

一歩中へ足を踏み入れた途端、ドアが消えた。

「どうなっている！？」

「私も詳しくは知らん」

何と無責任な！

そのとき、背後から音が聞こえた。

男が3人、銃を片手にこちらへ向かってきた。

「逃げるぞ！」

「なぜだ？」

あいつらは見るからにやばそうだったからだ。

「身の危険を感じるなら、殺せばいいだろう。お前なら簡単にできるぞ？」

アリスの言うことは間違っていない。

覚悟がない、確かにそうだった。

「とりあえず今は逃げるぞ！」

当てもなく、ただひたすら走った。

こういうところでは河を下っていくと村に着くはずだと思い、すぐに河を下っていった。

しかし一向に村は見つからない。

それどころか、見たことのある景色を何度も繰り返し見ている。

「はあ、はあ……ばか者が……はあ……殺せばいいものを……」

「雲の配置も変わらない。男どもの足音もほとんど遠ざかっていない。これはバーチャルか？」

そう思った瞬間、男達は急に走り出した。

そして俺達の前に姿を現した。

何のためらいもなく打ってくる。

「ま、待て！話を……」

男のうちの一人がバググからミサイルのようなものを取り出した。そのまま容赦なく発射し、爆音と共に爆風に吞まれた。

「ごほっ……ごほっ……」
爆風に飛ばされ、アリスと離れてしまった。
数十メートル先、アリスを目の隅に捉えた。

この状況で立ち上がり、こちらに手を振っているではないか！

「ば、ば……っごほ、ごほ……す……ごほっ……」
肺に入った砂で、うまくしゃべることができない。
こちらに走ってくる。

徐々に砂煙がはれてきた。
まだ待て！あいつらに見つかる！
そう、叫びたかった。

立ち上がり、あいつの元へ走り寄って地面に押し倒したかった。
まだ走るところか、咳き込んで立ち上がることもできないというのに。

そして刹那の時。
彼女の表情は一瞬にして凍りついた。
横から玉が流れ、彼女の頭を貫通した。

まるで漫画のコマのように、鮮明にくっきりと、少しずつ血を流し、その場に倒れこんだ。
ドサツという音に正気を取り戻し、同時に体の自由も利いた。

「ア、アリスっ！」
すぐさま駆け寄った。
男達なんてどうでもよかった。

アリスは死んでいた。
確かめる必要もない。
頭から血を流し、ぐったりとしている。

額の真ん中には赤黒い穴が開いていた。
俺は立ち上がり、振り返った。

3人はこちらの行動をしつかりと見ていたらしく、三方向から銃を構えていた。

まるでアリスと出会った時と同じ状況だと思った。

ただひとつ、あの時と今では明らかに違うものがあった。

彼らが引き金を引く前に、叫んだ。

自分でも驚くほどの声量で、怒りのままに、それでもって冷静に。

「死ね」

銃口は俺ではなく、俺を囲むようにしてお互いの頭に向けられた。

そして銃声と共に地面には4体の遺体が転がった。

自分が殺したのだ、と思う余裕もなかった。

心は静かで空っぽだった。

決意

どれくらい経っただろうか。

気がつくのと、元のビルの一室に戻っていた。

倒れた4体のすぐそばで膝を付き、虚ろな目をしていた。

罪悪感。

自己嫌悪。

正当化。

これらの要素が頭の中をぐるぐると回り始めた。

そんなに、辛いか？

「……ああ」

頭の中に木霊する声。

女一人守れなかったのは自分に覚悟がなかったから

「……ああ」

今はもう、守りたい人のためなら自らを汚してもいいか

「構わない」

ふと、風が吹いた。

そして信じられない光景を目の当たりにした。

「なっ……！？」

「覚悟くらい初めからしておけ」

アリスが立ち上がり、話しかけてきたのだ。

「お前、頭は……」

「痛い。だが死なないから安心しろ」

驚きと安堵から腰が抜け、床に倒れこんでしまった。

アリスは本当に大丈夫なようだった。

「私は不老不死。だがそいつらは違う」

彼女以外の死体は依然としてぴくりともしない。

「お前が殺した事実は変わらない。自分を正当化なり何なりすればいいさ。これからもっと多くの人を殺さなければならぬのだから

な」

薄々感づかれていたとは思っていた。

俺は自分を犠牲にすることができない。

弱い、人間だ。

だからこそ殺人を犯してしまうことによって、自分が罪に問われるなど絶対に嫌だった。

しかし考え方が変わった。

「黒色の絵の具は純白の紙に一滴垂らすだけで黒を作り上げる。漆黒の紙に一滴垂らしたところで何ら変わらない」

そう、自分を犠牲にしない殺人。

アリスは黙ってこちらを見続けていた。

何も発せず、しつかりと聞いていた。

「あの男は言っていた。戦争で人を殺すやつは英雄であり、日常で人を殺すやつは犯罪者だ」と

空いた心の隙間を埋めたのは憎悪だった。

ただひとつの到達点を指すために必要なものだった。

「俺の殺人が黒だというのなら、あいつは白なのか。白を作り上げるものは周りを黒に染めている、あいつ自信の悪ではないのか。俺は周りの手は汚さない。何があっても！」

立ち上がり、決意を示すように見つめた。

「自らを黒く染め、周囲に白を作り出す！必ず、黒く染まった腐った世の中を変えてやる」

また目の前の女は不気味な笑顔を作った。

前よりはよっぽどやわらかい笑みに見えた。

「屁理屈だな」

「何とでも言え、これで俺は二度と迷わない。必ずあの男から全てを奪い、殺す」

「……」

俺は自分の決意を示したというのに、アリスは小さくつぶやいた。

「……」

到底、理解しえないことを言った。
もちろん鼻で笑いながら。

学生でいると、理不尽なことが多い。

例えば理解に苦しむ校則であったり、授業についていけないような人……いわば足手纏いを目にかけてたり。

それらは今ではなく、大人になってから必ず役に立つと大人たちは口を揃えていう。

自らのことを、子供である俺達にうまく説明できない時点で役に立っていないと思うのだが。

「やっぱり、榊は変わらないな」

太陽の光が心地よい屋上で読書をしていると南城が上がってきた。

「小さいときから習い事には真面目じゃなかったよな」

「ああ、くだらないからな」

俺はページ数をしっかりと記憶して本を閉じた。

「そういうお前もサボりか」

「まあそういうことになるかな。ほら、僕らだけであんまり会話できてなかったし」

その後は二人で思い出を語り合った。

南城は見た目こそ変わったようだったが、中身は全然変わっていないと安心してた。

生徒会部での行動を見ていればそれくらいわかっていたが、こうやってゆっくりと話をするとまた改めて実感することができた。

平凡で楽しいひと時だった。

「榊のお父さん、ピークやってるんだね……すごいな」

「ああ、そうだな」

「今度の改革には驚いたよ」

彼の言う改革というのは国家二分計画。
国を西と東に分けるといふものだ。

西には劣位民が、東には優位民が移住する。

簡単に言えば、人より優れた成績を修めたものは東に、人より劣った成績を収めたものは西に住む。

その成績は仕事だろうが学歴だろうが何でもいい。

コンピュータからランダムに選ばれた国民二人を総合的に比べ、振り分ける。

その振り分けが始まるのは1年後。

今は皆何事にも必死に取り組み、周りより優れた人になろうと奔走している。

なぜならば優位民は劣移民に対してピークと同等の権力を手に入れることができるからだ。

逆に言えば劣移民は優位民の下僕となる。

「俺はああいうやり方は好きじゃない」

「君はそうかもね。でも何百年に一度と言われる不況を、たった1ヶ月余りで打破させた改革は心からすごいと思う」

あの男をすごいという眼差しで見ることができるといつに少しイラつとした。

「榊がやる気になれば絶対優位民になれるのにもったいないね」

「お前だつてそうだろう」

俺達がこんなにもくつろいでいられるのは学生は国家二分計画の対象とならないからだ。

つまり大人だけが醜い争いを行っている。

「そろそろ戻ろうか」

今この瞬間にも蹴落としあっている人々を見て、楽しんでいるあの男を想像すると虫唾が走る。

つるつるの穴に指を入れた。

一本、二本、三本……

その指をしつかりと奥まで入れる。

いく途中で抜けたら笑われる。

そして思い切って投げた。

「うまー！」

生徒会部の活動というのは、本当に娯楽でしかない。

いつもの4人に南城が加わり5人での活動。

副会長曰く、これは南城の歓迎会の延長線上らしい。

「会長これでストライク6個目かあ。しっかしあたしは負けないわよー！」

「会長VS副会長の戦いだねー」

スコアを見るとダントツで飛びぬけている二人。

俺と副会長だ。

ちなみに俺はボーリング初心者、まったくの未経験。

球をまっすぐ転がしてピンを倒すだけの簡単な遊び、と思っていたらなかなか奥が深い。

こんな部活いいのかという気持ちも忘れて楽しんでいた。

「こんな毎日が続けばいいのにな〜なんて」

思ってるのだろうか、ミコトは。

アリスは一人お菓子を食べながらベッドに転がっていた。

テレビの右上に表示されているのは国家二分計画のカウントダウン。

まだ時間はあるのは確か。

この日常を守りたいならばさっさとあの男を倒すべきだと思っただがな。

ぬるい。

非常に。

初陣

「いくら何でも早すぎだろ」

日曜の夜。

時計の長針が数字の10を指そうとしていた頃。

アリスは突然支部をつぶしに行くぞと言いはじめた。

「早く来い」

玄関で待っているアリス。

顔を晒すわけにはいかないため、まるでオペラ座の怪人のような格好で急いで向かった。

流石に仮面はまだつけていない。

自分でも滑稽だと思ったが、こうするくらいしか思いつかなかった。

「何だ、武器は持たなくていいのか？」

「ウイスがある」

「他人の手は汚さないのではなかったのか？」

「……他人に殺人をさせたとしても俺の命令だ。汚れるのは俺だ」

「お前の正義は言葉遊びだな」

いつものように鼻で笑い、扉を開けた。

「今では姉のためだけでなく、自分の正義を証明するためにあいつを殺すのだろうか？その正義の屁理屈を忘れるなよ、ミコト」

道路の真ん中で突っ立っていた。

「危ないだろ！どけよ！」

車のドアを開け、こちらまで怒鳴りながら歩いてくる。

「少し手伝ってくれないか」

男は帰宅中のサラリーマンだろうか。

この男にも家庭というものがあつたのだろうか。
平和な時を壊してしまつてすまない。

だが、いずれ壊れてしまうこの世。
少しだけ時期が早まったただけだ。

「……主の仰せのままに」

「ではまず車に俺とこの女を乗せてもらおう。そして指示した位置まで移動を頼む」

俺とアリスは車内へ乗り込んだ。

後部座席には、クマのぬいぐるみを抱えた小さな男の子がいた。
こちらを見て驚いていた。

声も出せないのだろう。

「……降りろ」

男の子は何も言わず車から降りていった。

「非情だな」

「無法地帯に連れて行くのと、ここで置いてけぼりにされるのと、
どちらがマシか考えてみる」

車はエンジン音を鳴らし、発車した。

「支部には法的縛りが無い。まともなやつは一人もいないと考えて
いい。一般人でも敷地に足を踏み入れた時点であの世行きだ」

「どこの支部もそうなのか？」

「ああ。そして俺達の居場所から出来る限り離れたところを第一標
的にした」

自分の住んでいる近くの支部から順番に潰していったら犯人の割り
出しはすぐにされてしまう。

極力慎重に、それでいて確実に潰していく。

「明日の学園には間に合わせるように計算した」

「私が行くと言ってからほんの数分でしっかりとした計画を立てて
いるとはな。偉いぞ」

素直に喜べない自分がいた。

決心がつかなかっただけで、何通りもの計画はもともと立ててあっ
た。

ウイスを偶然手に入れたが、たどえなかったとしてもあの男の場所

へは行くつもりだった。
復讐に。

「綺麗だな」

「ん……ネオンか？」

「ああ、もう何十年とあの状態だったからな。外を見るのは久方ぶりだ」

こいつが外を放浪したがるのもそのせいだろうか。

しかし、何十年という時間。

自分が目を閉じ、眠っている間にそれだけの時間が流れたとしたら
どれだけ恐ろしいことか。

周りに知っている人はいない。

科学技術の進歩。

知らない電化製品。

まるで不思議の国に迷い込んだかのように錯覚してしまう。

「お前を閉じ込めていた男達は何なんだ？」

「どこの時代にだっているだろう。研究し、実験し、その力を自分の
のものにしたがるやつは」

「……不老不死を望んだ科学者達か」

「そんなところだろう。或いは……」

車が止まった。

周りに民家や建物はなかった。

間違っただけで入ってしまったら殺されるのだから当たり前だろう。

聳え立つ建物は、中世ヨーロッパの城そのものだった。

「お前の初陣だな。どう入るんだ？」

俺は仮面を装着した。

付け心地は悪くない。

「ついてくればわかるさ」

身長は2倍はあると思われる堀。

門を探した。

もちろん警備にあたる人がいる。

見つかることのないよう、壁に背を向け立った。
入り口は一箇所しかない。

「見張りを始めてから現在、午前5時まで怪しい人物はいなかった。
次の警備に交代するため、自室へと戻った」

「何を言っている。まだ1時だぞ」

アリスは警備員に対して言ったということがわかっていないようだった。

俺は門を指を指した。

思惑通り警備員はいない。

「今から1時間でこのリーダーを殺して帰る」

「難しいことを言うな」

「本当はここからウイスで殺してしまいたかった。しかしウイスは
相手の顔がわからなければ効力がないようだな」

アリスはにやけていた。

きっとこのことを知っていたが教えてなかったのだろう。

教えそびれたのか、ふざけて教えなかったのかを考えたら絶対に後
者だと思う。

「お前には手伝ってほしいことがある」

『侵入者だ!』

城の中に放送が流れた。

俺は城に足を踏み入れてすらいなかった。

敷地内に入り、庭のど真ん中で鳴り響いた放送。

ほんの数秒で支部の警備員に囲まれていた。

「赤外線センサーが張り巡らされてるというのに……バカな侵入者
だ」

リーダーと思わしき人物が現れた。

「支部長、捕らえますか？」

「かまわん、打て」

合図と同時に全員が発砲した。

弾は全て命中し、アリスは倒れた。

俺はすっかりとこの目で見た。

そして扉を開けた。

予想通り警報はならない。

城の構造はわからないため、目的の場所をすぐ見つけることができないかどうかは鍵となっていた。

「俺はついている」

扉を開けると警備員が二人いたが、すぐに肉の塊となった。

『聞こえるか』

そう、俺は放送室を乗っ取ったのだ。

慌てふためくバカなやつら。

「窓際で死ぬとは……いやな役回りだ」

「なっ……！？お前死んだはずじゃ……」

モニターに映る奴らの動きを見て笑いを堪えていた。

『ただちに本部へと連絡せよ。近い日に我らはお前らを殺しに行く』と

計画通りに全ての事が進んだ。

「その条件は呑めない。テロリストめが……たった二人で何ができる？死に損ないの女と放送室にいるお前を殺せばそれで済む話だ。

わざわざ主の手を煩わす必要などない」

リーダーと思われる男ははっきりと言った。

思惑通りの台詞。

自分たちが死ぬことなどないと確信している。

『どうやら主を間違えているようだな……いいだろう。もう用はない。死ぬ』

カメラに向かって話していた男を含め、全ての警備員は倒れた。

「まったく……死なないとは言え、痛いと言っただろう。二度とやらせるな」

アリスは放送室へ現れた。

身体は血だらけであったが、外傷はない。

そもそも

「っ！何をする！」

「モニターで警備員の顔が見えるだろうが」

アリスは俺の頭を思いつきり殴った。

「万が一なかったときのためだ」

「ふんっ。今のでチャラにしてやる」

受ける傷は本当に痛いのだろうか。

何か殴られたことに納得のいかないまま城を後にした。

モニターには無残な死体だけが映し出されていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5618k/>

Whisper

2010年10月9日21時32分発行